彫刻的技術。立体美の單位を修得する実習にして、生物の実寫より進んで構成学の実習

自然描出。自然物及人工物の現象より構成の單位を描出する練習

Analytishes Naturzeichen

Konstruktive Analyse

Lineare Analyse

装飾画。装飾藝術の觀念を平面に表現する技術を習得せしむるものにして、絵画科の領域に非ざる独立的境地の開拓を学ばしむるものなり。

圖案。は学課及実技の修得順序に應して課する問題にして、自己の意匠による新案を製作せしむるものなり。

附、

細目に渉る教授法及施設に関しては玆に附記致しませんが、現状の急務は少なくとも実技殊に図案製作の課題並に講評の擔任を二部制にしなければならないと思ひます。

即

古曲〔典〕による製作方面を擔任するものと現代装飾による製作方面を擔任するものとの二部であります　或は工藝図案と装飾図案の擔任を区別してもいゝと思ひます　（了）

大正十五年五月十五日

斎藤は、最も急務とするのは「古典による製作方面」を担任する者が主導権を握っているため教育がそちらへ偏っている図案科に「現代装飾による製作方面」の教官の指導性をもっと発揮させて、前者、後者に同等の比重を置いた教育を行うことだと主張しているが、当時生徒だった人々の証言ではこの主張が直ちに実行に移されたとは考えにくい。しかし、右の意見書の内容は、昭和七年の図案科改革へ向けて学内の意識を徐々に高めて行く一つの要因となったことだろう。新進の図案家森田武が助教授に起用されたり（大正十五年四月）、田辺孝次が在外研究の上で西洋工芸史の講義を開始した（昭和二年一月）のも、改革へ向けてとられた措置だったと思われる。

⑨ 公開講座の開設

大正十五年五月、本校は「美術に関する特種研究講義」と題する公開講座を開設した。これは一般から聴講者を募集して毎週土曜の午前に一講座、午後に一講座を開き、本校教員その他が専門的講義（無料）を行うもので、開設の事情については同年四月十五日の『東京日日新聞』が次のように報じている。

美術學校が……民衆に奉仕

來月一日から始める公開講座

東京美術學校に教育團體などから公開講座を希望して來るけれど官立の專門學校として一般民衆のために特に公開講座を設けるといふ前例もなく豫算も許さないので實現しなかつたが今度同校教授矢代幸雄氏の盡力と某教育團體の寄付により文部當局の諒解を得て公開講座の實現を見るに至つた、この講座は一時的なものでなく永久に存續するもので五月一日から開講される　講座は同時

に二講座を開き一つは學術的方面、一つは美術の實際問題について講義される、

本校が従来一般に対して全く門を閉ざしていたのではないことは、科外講義の開設（268頁参照）によって明らかであるが、今回は科外講義の制度をより拡充して実施することになったのである。右の記事中「某教育団体」とは財団法人図画教育奨励会のことである。公開講座の実施状況は『東京美術学校校友会月報』に掲載された広告その他によって凡そ次のようであったことがわかる。

大正十五年五月一日より毎週土曜日

一、欧米博物館事情と博物館理想

教授矢代幸雄。午前十時～十二時。

二、古絵巻物の研究

教授松岡輝夫。午後一時～三時。

同年九月二十五日より毎週土曜日

一、藤原時代の仏画

講師田中豊蔵。九月二十五日～十月三十日。午後一時～二時半。

二、日本木彫の技術に就て

仏像の刻出し、木取木寄の法
玉眼白毫の入方及び内刳の事
彫刻刀、砥石の良否、木材の用法等

名誉教授高村光雲。十一月六日～十二月四日。午後一時～二時半。

三、レオナルドオ・ダ・ヴィンチの研究

教授矢代幸雄。九月二十五日～十二月四日、午後二時半～四時。

昭和二年一月二十二日より毎週土曜日約六回

一、六朝及び唐の画論

東京帝国大学教授 文学博士 瀧精一。午後一時～二時半。

二、浮世絵発達の文化史的考案

田中喜作。午後二時半～四時。

同年五月七日より毎週土曜日約八回

一、古絵巻物研究（続き）

教授松岡輝夫。午後一時～二時半。受講者男女計四二一人。

同年十月一日より毎週土曜日

一、銅器から見た上代文化

講師・文学博士高橋健自。十月一日より約九回、午後一時～二時半。十月二十二日以降は二時～四時。受講者男女計五十六人。

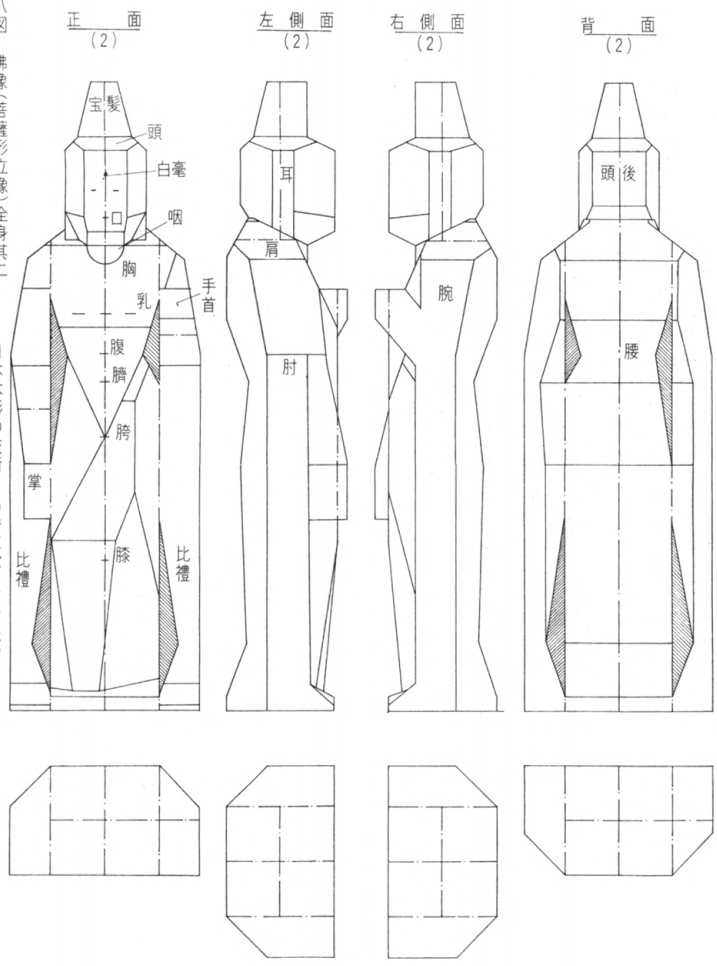
二、楽浪時代の工芸

講師・工学博士関野貞。十月二十二日より約六回、午後一時～二時半。受講者同右。

高村光雲の講義については、配布された次の参考資料（青焼図面、各五六×七七・五cm。菅原安男氏旧蔵、竹林信雄氏蔵）が現存する。江戸仏師の木寄せ法を後世に伝えようと意図して作成された意義深いもので、これについては山崎隆之著「仏像の造像比例法

――高村光雲「仏師木寄法」について」（『愛知県立芸術大学紀要』第十五号。昭和六十一年）の研究がある。

日本木彫の技術　名誉教授高村光雲
東京美術学校特殊研究講義（大正拾五年秋）
木寄法
第壹図　仏像（菩薩形立像）首之部
第弐図　仏像（菩薩形立像）胴之部其一
第参図　仏像（菩薩形立像）胴之部其二
第四図　仏像（菩薩形立像）胴之部
第五図　仏像（菩薩形立像）左腕之部
第六図　仏像（菩薩形立像）右腕之部
第七図　仏像（菩薩形立像）全身之部其一
第八図　仏像（菩薩形立像）全身其二
第九図　隨身（神）半結伽像首之部
第拾図　隨身（神）半結伽像胴之部
第拾壹図　隨身（神）半結伽像両手両足袖張等之部
第拾貳図　隨身（神）半結伽像全身之部其一
第拾参図　隨身（神）半結伽像全身之部
第拾四図　蓮台　返華之部
第拾五図　蓮台　敷茄及蘂之部
第拾六図　蓮台　華弁之部
第拾七図　蓮台組合せ　仏身座像
第拾八図　光背之部其一
第拾九図　光背之部其二



木寄法　第八図　佛像（菩薩形立像）全身其二
日本木彫の技術　名誉教授　高村光雲
東京美術學校特殊講義（大正拾五年秋）

第弐拾図　仏身座像

なお、受講については「本講義ハ何レモ研究本位ノモノトス、故ニ聴講者ハ特種研究者或ハ特種研究希望者ニシテ且其聴講ヲ希望スル講義ノ完了スルマデ連續出席シ得ルモノニ限ル」という規定があった。

因みに第一次講義（大正十五年五月一日開講）については「大正十五年七月以降、特殊研究講義ニ関スル往復書類、教務掛」が現存するのでそれによってどのような人が受講したかがわかる。即ち職業別では官吏三〇、教官五、教員二二、画家七五、学生二二〇、会社員四、商二、工五、新聞・雑誌記者四、僧侶・著述家・人夫各一、無職九五、計四六五であり、出身学校別では本校一四九、女子美術学校八七、私塾二八、東京帝国大学二四、東京女高師・川端画学校各一二、早稲田大学一〇、文化学院八、文部省図書館講習所七、東京高師五、日本大学三、聖心女子大学・府立第一高女各三、京都帝国大学・九州帝国大学・北海道帝国大学・駒沢大学・中央大学・慶応義塾大学・日本女子大学・上智大学・同志社大学・札幌農科大学・華族女学校・東京女子大学・女子学習院・第一高等学校・外国語学校各一、その他九九、合計四六五とある。なお、この文書には松岡、矢代両教授の講義要項も綴込まれている。

⑩　郊外写生、郊外教授等

郊外写生日本画科

年	月日	学年	備考
大正12	1・29〜2・3	1〜4	・期間中学科は必ず出席すること。
	5・21〜5・26	〃	〃
11		2	11・17　監督教官付添
		3、4	11・14　方面随意 右の写生を基として11・19〜11・30の間に風景画一枚を制作し、11・30に提出すること。
13	1・28〜2・2	1〜4	・期間中学科は必ず出席すること。
	6・2〜6・7	2〜5	・〃　（体操授業は免除）
	10・27〜11・1	2〜4	・〃 右の写生を基にして次週に風景画（小画箋三分の一）を制作すること。
	11・17〜11・22		・同前　（同前）
14	2・2〜2・7	1〜4	・〃
	5・4〜5・6	3、4	右写生を基にして教室で風景画を制作し、5・16までに提出のこと。
	5・18	2	写生地　御宿附近。
	6・1〜6・7	2〜5	写生地　潮来方面。
	10（風景競技）	2	〃　方面随意。
		3	右写生を基にして教室で二週間制作し、10・30完成のこと。
	11・16〜11・21	1〜4	・同前
	11・14	1	・〃 写生地　青梅附近　監督　小泉勝